學界展望

終戰後我國に於ける西洋史の動向

——特に社会經濟史学を中心に——

太平洋戰爭に於ける敗戰は、我國のあらゆる面に大きな變革を餘儀なくせしめた。政治に、經濟に、思想に、我國民がかつて經驗した、恐らく最大と思われる價値の轉換がなされたのであつた。こうした中にあつて、ひとり學界のみが例外たり得る理由は全く存在しない。極言すれば、敗戰以來の西洋史の動向もこうした時代の動きと共にあつたと言い得る。今少しくこれを具體的に眺めてみたい。

戰後、最初に人々に感ぜられた事は、日本人の極端な國家主義、自惚、獨善主義という事であつた。それ故にこそアメリカをも含めた西洋に對する再認識の必要が叫ばれ、その第一歩として現われた現象が、概說書、若しくはそれに類似したものの洪水であつた。「西洋史概說」(上)(中)(尾鍋輝彦)、「概觀西洋歷史」(村田數之亮)「地中海世界史」(井上智勇)、「近代歐洲政治史」(岡義武)、を生む地盤となつたこの要求は、その後も益々强く、且つ益々深くなつてゆき「概說西洋歷史」(上)(下)(勉井高孝、林健太郎)「西洋史概說」(上・下)「西洋史學入門」(上・下)「京大西洋史」(大野眞弓)等となり、尙多くの舊著の增補、改訂版を見るにいたつている。勿論この樣に多數の概說書が出現した理由としては單に西洋歷史に對する知識の慾求というのみではなく、特に最近に於いては、世界史との關係に於ける西洋史、新しい歷史教育としての西洋史というものがとりあげられだしたのであり、この樣な立場からの概說書は、今日に於いても尙續々と出版されている。しかも經濟狀勢の惡化に伴い、特殊な論文集や學術雜誌が經濟的に行づまりの狀態にある時に於いても、概說書のみはその大衆性の故に、比較的廣い購讀者層をもつという事は、概說書の洪水に一層の拍車をかけるに十分なものがあつた點は否めない事實であろう。我々はここにも亦、日本の文化とよばれるものの跛行性を認めないわけにはいかないのである。

次に唯物史觀の急激な擡頭に眼を轉じたい。戰時中、狂信的な彈壓下にあつたマルキシズムも、戰爭の終了による「思想の自由」の時代に入ると共に、合法的存在となり、ブルジョア史學、正統派史學と激しい對立を見せるに至つた。唯物史觀はその合理性の故に、又人々の主體性の喪失より來る新しい「何ものか」への慾求の故に、更には我國の政治的、經濟的混亂の故に、換言すれば、物的並び

に精神的客觀情勢の中から異常な躍進をとげ、多くの信奉者、シンパをとらえると共に、更に多くの盲從者や英雄氣取の外見的信奉者等の、マルキストの側にとつても迷惑な者をもその中に含まねばならぬ運命をもつた。更に長い年月を經れば、こうした者達は當然淸算されるであろうし、マルキシズムに對する冷靜な見解や批判が生れ出る事も勿論であろうが、兎も角今日の段階に於いては、純金のマルキスト、シンパ乃至は講壇社會主義派、ブルジョア史家に大別される三者の間に、歷史學の最も基本的な問題に關す論爭が展開されるのも亦必然の成行である。このようなイデオロギー、史觀の爭は、歷史哲學や歷史學方法論のみにとどまらず、むしろそれ等を越えて、歷史事實研究の見解のそれとして現われる事が多かつた事は注目に値する。これらの中で最も華々しく行われたのが、服部之總氏の「絕對主義論」を中心に展開された絕對主義論爭であつた。今はこの書に就いての私見を述べる暇はないが、こうした問題の性質上、本質、起源、成立基礎、類型、把握方法等を廻つて各人各樣の見解を示し、更には東西の絕對主義の比較にまで及んでいるかの如くである。尙、西洋史に關しては、林健太郎氏がプロイセンの「絕對主義について」（歷史學研究一二五号）を書かれ、自己批判（歷研一二七号）をも併せて行われているし、藤原浩氏も「プロシヤ、オーストリア絕對主義支配成立の比較」（歷研一三六号）を爲されている。

最後に最も注目すべきものとして、所謂社會經濟濟史の流行を擧げねばならなぬだろう。このような學風が盛んについてきたのは、勿論大塚久雄氏の「歐洲經濟史序說」の輝しい成果の結果である事は論を俟たないであろうが、一つには戰後の我國に最初に紹介された、アメリカ風史學の影響が强かつた事も見逃す事の出來ない所であろう。社會經濟史學派に屬する個々の人については、大塚氏の前揭書は、無論終戰以前の作品であるし、その他の人々も多く英、獨、佛の研究書を參照されているようではあるけれども、從來我國で支配的であつたドイツ史學流の政治史とか精神史とかいわれるものは、餘りにもパーソナリティに重點を置いたものであり、社會そのものの底からもりあがる因果律や必然性の探究に缺けた嫌いは、少くとも我國にとり入れられた面のみについては否定出來なかつたといわねばならない。こうした點に於いてアメリカ史學の導入は社會經濟史を受入れるに十分な態勢をとらしめたのであろう。かくしてマルクスとウエーバーのもつ意義が認識されねばならなかつたのである。大塚氏は戰後も「近代資本主義の系譜」、「近代化の歷史的起點」、「近代化の人間的基礎」の如き問題作を續々と發表され、イデオロギー的對立をも含めて、批判、反駁、再反駁といつた論戰が各方面の紙上をにぎわゝせた事は、未だ記憶に新しい所であるが、結局大塚氏の主張は、近代社會を以て資本主義社會なりとされ、近代化、即ち近代資本主義成立の途には前期的商業資本よりの轉化

と、近代的産業資本自體の發展という二つの類型があるとされていると考えて大した間違はないであろう。この大塚氏の著作を廻つて、近代性、或いは近代化の論爭が激しく行われたのであり、大塚テオリーをフランス、ドイツに適用したものが、高橋幸八郎氏の「近代社會成立史論」松田智雄氏の「近代の史的構造論」であろうが、この兩者については後にふれたい。

この樣にして誕生をみた社會經濟史的歷史把握の方法は、更に遡つて中世、古代に於いても行われた。かくして出發した所謂封建論爭と呼ばれ、更に廣く中世社會、經濟、文化に關する諸々の研究は一面、最初に述べた世論のヨーロッパの本質追求の一型態として、鈴木成高、井上智勇、上原專祿、增田四郎等各氏によるヨーロッパ社會成立期の研究、乃至は古代・中世轉換の問題、更には原始ゲルマン研究の延長でもあり、又、ドーソン、トレルチ、ドプシュ、ピレンヌ、ウェーバー等に據る者への唯物史觀への挑戰と見る事も出來ようし、法制史的立場と經濟史的立場との相違と言う事も出來るであろう。

以上極めて大雜把にではあるが、戰後に於ける我國西洋史學界の辿つた方向と問題を眺めてきたつもりである。そしてこうした問題とは多少異るが、インフレ、金づまりによる購買力の低下をはじめ、あらゆる惡條件の中を、「歷史學研究」、「史學雜誌」「史林」を筆頭に、現在としては唯一の西洋史專門雜誌である「西洋史學」の發刊をみ、その他復刊、新發足の學術雜誌の名を耳にすると同時に、「社會構成史大系」の如き組織的出版が、次々の力作を盛つて現われてきた事を同學の士と共に喜びたい。（卷末リスト參照）

以下急いで、具體的に社會經濟史學派を中心に作品を眺めてゆきたい。

――古　代――

古代史に關するものはそう多くない。それが主として社會經濟史であつた點から動向を決定してしまうことは危險であるかも知れない。何故なら著作は井上智勇氏「ローマ經濟史研究」村川堅太郎氏「羅馬大土地所有制」同「スパルタ型國家の農業生産者」同「ギリシヤ研究入門（歷史）」に限られ、定評ある兩氏が既定の學風を以て著わされたものに過ぎないので、ことさら古代史が社會經濟史に向いたと云い切ることは少し大膽の懼れなしとしない。

中世及び近世の分野に於いては、終戰後マルクス主義の復活と現實の要求としての近代性の探究などが問題となると共に、封建制、絕對制、都市などの研究が一時に華々しく現われ、明らかに顯著な動向として取り上げられるものを持つている。此のような意味で兩氏のそれを古代史に於ける社會經濟史への歩みとして取り擧げ得るかどうかは問題である。寧ろ兩氏の研究の成果が時を同じくして尊敬すべき成果としてあらわれ、且つ一般の思潮に歡迎されたところに注目すべきであろう。

井上氏の「ローマ經濟史研究」の最初の二篇「ラティフンディアの成立と經營

」及び「コロナトウスの本質と成立」は嘗て此の史林誌上で四回にわたつて發表されたものでそれから相當の年月がたつている。第三篇「ローマ商工業の發展と構造」が新しく執筆されたもので、共和末期から帝政初期にかけて「マニュファクチャー的段階」に迄發展したローマ產業が資本主義的段階に迄發展せず、ローマ社會の農工分離の不完全さと屬州工業の勃興によつて、かえつて衰微を招いたことを明らかにされた。いずれも既學說の論破に相當な部分を費やされ、かつ又その論理性において氏一流の鮮かさを持つておられる爲に專門外の者にとつても既學說の概觀を知ることが出來、大へん有難いものである。少し後に村川氏の「羅馬大土地所有制」が發表された爲に興味ある比較を呈した。方法の相違によつて必ずしも一致してはおらないが、井上氏が極めて廣い視野に立つて既學說の檢討及び當時の政治、軍事等あらゆる方面からの綜合判斷を試みられるに對し、村川氏が他方、文獻學的考證に主力を注がれるところにそれぞれの特長があらわれている。村川氏の「羅馬大土地所有制」については當誌上に別に書評が掲載されるからそれを參照せられたい。

村川氏のスパルタ型國家の農業生產者はイオニア、ギリシヤ世界及びローマ世界に典型的であつた所謂「古典的奴隸」とスパルタ及びクレタ島のドーリア人のポリス・テッサリアに於ける直接生產者卽ちヘイロータイ・クラーロータイペネスタイと呼ばれる農耕者が如何に性質の違つたものであるかを追求され、彼等直接生產者がポリス社會內で特殊の社會構成を成していたことを明示された。それが類型研究である爲に古代專門家のみならず西洋東洋を問わず、ひろく社會研究に興味を抱く者にとつて極めて示唆に富む論文である。しかしその餘りの周到さと多元的態度の爲に印象が薄れて類型として把握するにはいさゝかの努力を必要とする。

村川氏「ギリシヤ史研究入門」中の「歷史」は或る意味で劃期的なギリシヤ史概說である。文化史方面の他執筆者との重複を避ける爲に敍述を政治及び社會經濟史に限定された。「時代による差異を論視しないが、なるべく廣くギリシヤ人の政治的社會的生活を太い線で描き出す」ことを目的とされた結果、社會の類型的特徵が明確に表わされている。ペルシヤ戰役ペロポネソス戰役などは殆んど觸れておられず、ヘレニズム時代に多くの紙面を割かれ、且つ最新のギリシヤ史の課題（移民、商工業、奴隸制度の性格等）が重點的に敍述されている點、一般概說書と著しく趣を異にする。この一面傾向的と云える敍述を敢えて入門書として提示されたところに歷史學そのものに對する氏の抱負が窺われるもので、古代史學界に獨自の歩みを續けられる氏の體系的な書として注目されてよいであろう。

ともあれ村川氏の存在がこれ等の著作を通じて大きく浮び出たことは最近學界の特記すべき收穫であつた。早くから精緻な文獻考證に他の追隨を許さない業績を發表されてきた氏が「奴隸制度の古典

的形態」（思想廿二、七）以來、最近の我が國學界の動きを敏感に受けとられて、苦悶にも似た努力を重ねて脱皮してゆかれるのは、その研究態度に於いて尊敬に値するものであろう。しかしながら氏の方法が現在の歴史學打開の最良の方法なりや否やそれは尚今後の成果を期待しなければならない。實證は歴史學の根本問題であると共に最初の段階であり、それの展開もまた歴史學の本質的課題である。靜的把握もまた歴史學の一方法であると共に動的把握もまた一つの方法でもあろう。尊敬する氏がその學殖によつて更に啓示を垂れ給わんことを願つて止まない。

社會經濟史方面では以上のほかに「歴史學研究」に宇尾野久氏が一論文を載せられているが、これは文章以前の代物である。クーランジュ、エンゲルス等の學説が入りみだれて甚だ難解である。何故未整理のかゝる草稿が載せられたか理解に苦しむが印刷にする以上他人に載ますのを意圖するのであろうから、もう少し編輯者の方で何とかしなければ執筆者に對しても不親切な結果に陥入るであろう。

文化史方面では村田數之亮氏の學位論文「エーゲ文明の研究」が刊行された。對象たる遺物の性質によつて、美術史の領域に入るものであるが、實物觀察の不能な我が國にあつて、美術史が如何なる方向を取るかについて一つの解決を與えておられる。更に、考古學が單に遺物の解釋に止まらず、ひろい觀點の下に歴史學的役割を果している點に於て、考古學界にも稗益するところが多いであろう。氏の多年の成果に對して滿腔の敬意を捧げる。此のほか我が國に於ける貴重な碑文學者である栗野頼之輔氏が本誌前號に「アリストテレス「ビニティア優勝者錄」とデルプホイの碑文」を發表されている。

以上古代史研究は世に於て少かつたとはいえ、いずれも學界の大きな收穫であつた點に大きな喜びを感ぜざるを得ない。

―中　世―

歴史的思考の不可避的な宿命はそれが何らかの意味において歴史的現實の諸力によつて規定せられるということである。これは最近における我國中世史研究の動向――正しくはその研究諸成果の傾向であるかも知れないが――を鳥瞰するときまず我々の視覺にさえ訴えて止まぬものがある。次にこゝ一、二年間に上梓された中世史關係の主要な述作を擧げよう。

(1)ヨーロッパの形成（鈴木成高）(2)中世精神史序説（高桑純夫）(3)封建社會の研究（鈴木成高）(4)封建制成立史序説（世良晃四郎）(5)ヨーロッパ成立期の研究（井上智勇）(6)中世の美術（吉川逸治）(7)ヨーロッパ社會の誕生（増田四郎）(8)獨逸中世の社會と經濟（上原專祿）(9)イギリス封建社會經濟史（矢口孝次郎）(10)封建的土地所有の成立過程（田中正義）

さてこれらの書名によつても直接讀者

に理解されることは、現在我國中世研究の關心が略〻二つの潮流を描いて流れているということである。換言すれば前にもふれたように、一つは所謂「封建制」を回る問題と今一つは「ヨーロッパの成立」をその歴史的課題として身近に感じているとも言えよう。このことは以上の著作に定期刊行物の諸論評を加えるとき愈々明らかとなつてくる。勿論(7)(6)の如き思想、美術方面における好著がなくはないが、これとて前記二潮流の研究に比するとき、その獨自な中世精神の解明に処しつゝも、未だ動向として特筆されるに足りないのはもちろんである。我々がこゝに言わんとするのはこの「動向」なのである。

終戰後我國史學界のみならず一般思想界をも賑わしつゝ今日に至つたものは所謂「近代性」の問題であつた。しかし「近代性」ということは直ちにそのアンチテーゼとしての「封建性」を豫想する。かくて「封建性」は「封建制」の究明を迫りつゝその何たるかゞ問われなければならなかつた。(例えば「封建制とは何か」思想No.338)從つて「近代性」といゝ「封建制」ということ自體日本の社會的現實に媒介された價値評價的觀點の優越を何としても見逃すわけには行かないのである。しかし前者のそれが終戰後一時店頭を充した際物類の横行を以て混濁されなければならなかつたに反して、後者はそれがより專門的な領域にわたるためか、地道な年來の專門家の手に成つたことは中世研究者にとりせめてもの幸いであつた。そして課題解決の焦眉の急に迫られて一般に勿論、主として近世研究者の立場からも不用意に準備された「封建制」ないし「封建的」なる概念が次第に冷靜な科學的批判の下に曝れつゝあることはまた二重の喜びといわれなければならない。

元來封建制度を廻る論爭はヨーロッパの學界に於ては既に久しいものであつたが、少くともその業績を一つの纒つた形に於て批判的に我が學界に紹介したものは先ず鈴木成高氏の大著「封建社會の研究」に指を屈しなければなるまい。從つてこの勞作に就いては既に評言も多い事であり(豊田堯氏、西洋史學II增刊四郎氏社會經濟史學一五ノ一史學雜誌五八ノ一)その部分的批判は夫々の專門的論文において個々の分野より提示されてはいるが、何といつても本書の特徴はその全般に通ずる問題史的展望と包括的體系性にあるといわなければならない。かと言つて概說書なる言葉(史學雜誌五八ノ一)では蔽い切れない個別的特殊研究にわたつていることは勿論であり、このことは以後我國の諸研究が直接間接に本書に論及していることを考えても明らかである。しかし敢えて讀後感の表現が許されるとすれば著者の多くの書物に通ずる啓蒙的論理性の過剩がその獨自な特長を考慮しつゝもこゝでも何か氣にかゝるのである。特にこのことは後篇について著しいが客觀的な科學的分析がより進む場合、論理の彌縫なくば幸いと思うのである。それと共に封建社會の多様的把握は一應それとして逆にこれが封建制度の上に投影せられて著者が初めに念願した概念規定の厳密性が恐らくは著者の意に反し茫漠たる多様の彼方に見失われたのではなかつたか。

しかしともあれ本書は學問の現段階における最新の指標として後進への意義は大きい。次に出た世良晃四郎氏の論著は主としてミツタイスによられた純法制史的研究であり、所謂封建制の「型」の析出を企圖された野心作として注目される。近時封建制概念の混亂が云々されるとき法制的分野のみよりするかゝる研究もこれを整序する意味において意義ある事でなければならない。一應かゝる概念論爭より身を引いて終始堅實な文獻學的學風を堅持されるものに上原專祿氏がある。氏の「獨逸中世の社會と經濟」はたゞ氏にしてのみ能くし得る史料批判的な佳篇を以て編まれている。殊に Capitulare de villis の如き邦譯はたゞそのこと自體が何にも增して高く買われなければならないことを附言したい。蓋し學問は迂遠な努力であり、史料批判は決して小兒病的なペダンチシズムではないからである。けれども史料批判的斷片の集成は直ちに以て體系であるかというと問題は自ら別である。何れをとるか、いかにあるべきかは既に個々人の世界觀に屬し、此處で深く觸れるべき性質のものでもあるまい。

我國で最も進んだ英國社會經濟史の分野では最近相次いで前掲矢口、田中兩氏の論作を得た。田中氏のものは太古よりノルマン征服に至るまでの英國土地制度の變遷を跡づけ、その間の封建的土地所有の形成過程を論證せんとせられ、ケルト的要素を强調することにおいてロマニスト對ゲルマニスト兩見解の止揚を意圖せられたものの如くである。我國において研究の比較的少いこの分野における着眼は敬服すべきであるが、敢て言わばケルト的要素の重視というア・プリオリな前提が豫想せられたためか、時代的制約に基く史料不足のためか、尙一段の說得力に缺けるようである。今一つ餘計なことではあるが社會經濟史の叙述は必ずしも特異な日本語のスタイルを必要としないことである。矢口氏の勞作は田中氏の扱われた時代に次ぐ英國封建社會の研究に向けられ、上部下部兩構造よりする稀にみる詳論であり、新學說に對しても尙愼重な態度の留保がみられる。只惜しまれるのは全體に通ずる動的な生成の把握が尙未だしの感を與える點でもあろうか。しかし我々はこの二論著の併用において略ゝ英國封建社會の成立史を通觀しうるのである。以上が大體最近の著書にみられる封建制度研究の概要であるが、これを以てするも曾て上原氏によつて注目された我國封建制度概念の混亂（封建制度研究の傾向昭和13）は今また別な意味で十全な彈拭をみたと言い難いのではなかろうか。近代性の問題が所謂資本主義の系譜を以て展開されたと同じ意味において、かかる社會體制一般よりする、また我國の現實的關心の過剩より來る封建制度の評價がかえつて思わぬ概念の混亂を誘致したのではなかつたか。堀米庸三氏の「封建制と家產制」（思想 No.320）は小論ではあるがこの點注目すべき論作である。

次に「ヨーロッパの成立」に關する問題であるが、このこと自體歷史學と共に古くまた新しい課題である。嘗てファン

・ドュ・シエクルの人々によつて膨氣ながら意識されたようなヨーロッパの運命が、世界史に何等かの問題を投げかける限りそれは關心を呼ぶであろうし現にそうである。從つてそれは單なる歴史學の範疇を越えた形而上學的な意味さえ帶びる。歴史學の立場に卽して言えば勿論歴史的形成體としてのヨーロッパの構造的契機を明らかにするにあるが動もすれば運續非運續論爭の空轉や歴史哲學的啓蒙に脱するおそれなしとしない。常識的範圍においては認められても、眞は恐らく精緻な個別的研究の上に築かれる金字塔でなくてはならないと言い度いのである。最近順次に鈴木成高氏、井上智勇氏、增田四郎氏の三著を得た。この中、井上氏の論著は古代史の立場よりする「ヨーロッパの成立」に論點がおかれ、他の二著と併せ用いるとき示唆多きものがある。これら三著は何れも年來の專門的立場よりする我が學界における少くとも一應の中間報告であり、東西共に旺んなこの分野の研究に一層の成果を期待したい。尙これに關しては最近（339）再版された故植村清之助博士の詳說があることは周知のことに屬する。

さて以上において略動向を叙し終つた我々は許された紙數内において簡單に吉川氏と高桑氏のものに觸れよう。先ず吉川氏の美術史は教養書というべく除りにも香り高き論考であり、巧まないフランス的な感覺によつて我々を小アジアより西歐にわたる各地各樣のキリスト教教會の堂奥に導いてくれるのである。キリスト教藝術發展の歴史的地盤についても著者は洗練された簡潔性を以て答えられるが、只歴史家の問題はこゝに殘る。勿論藝術との關聯においてゞあるが。しかし何も灰色の相對性に還元するだけが歴史家の任務でもない。我々はともかくこの著作のよさを高く評價する。高桑氏のものはアウグスチヌスを中心とする中世精神の獨自な把握であり、そのアナロギア・エンティスの想いは一般史家としても中世への態度として傾聽すべき多くのものを持つている。また紙數の都合上、兼岩正夫氏（西洋史學II十三世紀の一乞食僧の社會思想）舟越康壽氏（立命館文學63フルダ寺領と國家，進文書について（一））櫟川一朗氏（史學雜誌五八ノ四カロリンガ朝初期における從士制の問題）小松芳喬氏（思想三〇二英國封建制の崩壞）の諸論考其他讀譯一般がこゝでは割愛されなければならなかたことをお詫びしたい。

――近　代――

我國に於いて今更の如く近代化の問題がとりあげられたのは、敗戰によつて如實に露出せしめられた我が社會内部のほとんど總ゆる面の封建性、從つて近代化に於ける西歐諸國と比しての後進性が叫ばれたからである。西洋史のみならず、國史、東洋史部門でもこの問題が論ぜられ、更に廣く人文科學一般にわたつてこれが重視せられたのも、結局日本の現實と最も密接に結びついた問題であつたからである。そして日本の近代化に對する論としては、大體に於て次の二つの說に分ち得ると考えられる。卽ち一は近代化

の途は必ず西歐諸國の通つたように進まねばならぬとするものであり、他は日本の、東洋の特殊な歴史的、社會的背景を強調し必ずしも西歐型の近代化が唯一の途ではないと說く者である。（例えば京都大學人文科學研究所第二部會員會における昨年の）

封建社會から近代社會への變遷ということは、結局封建社會に對する近代の社會構造を明かにする事と、變遷過程の分析とがなされなければならない。こうした意味に於て最大の波紋を投げかけ、且問題の出發點となつたのは言うまでもなく大塚氏の業績である。この事に關しては前に稍々ふれたが「資本論」中の資本主義化への二つの途を命題にされた氏の論を「近代資本主義の系譜」の中に開かう。即ち「近代資本主義の發達と言う視角からして、その歴史的性格を全く異にする……少くも二つの……範疇の存する事が略ゝ明かであろう。即ち一方に於ては、近代資本主義發達の樞軸をなす產業資本と、他方に於ては、その形成を阻止する保守的商業資本と。ことに後者は客觀的事情の如何によつては、露はな封建的性格をさへ示す」。「凡そ商業資本一般の發達の中に近代資本主義生誕の系譜を見出そうとする通例の見解に比してウェーバーの見解の方がはるかに史實に即している。」と大塚氏はブルジョアジーへ轉化する社會層と近代社會と封建社會の構造を明かにする事によつて西歐型近代化を說かれるが、社會構造と地域とを結びつける考え方は、高橋幸八郎氏の「近代社會成立史論」及び松田智雄氏の「近代の史的構造論」により一層明確となり、エルベ・ザールの線を以てする東歐と西歐の類型の相違は、近代化への樣相を一變せしめ、先進的と後進的な社會を生み出すのである。高橋氏の著書は最も西歐的なフランスの革命以前の研究であるが、その難澁な文章は、同書の理解をいよいよ困難なものとするのであり、この點一考の餘地があるであらう。けれども封建時代よりアンシェン・レジームに至る社會の分析は、大塚氏のそれを一層精密化したものといつてよく、從つて高橋氏の言われんとするところは、さまで難解なものでないのではなかろうか。唯高橋氏の如き方法がフランスのどの時代まで可能であるかは多少の疑問がないでもない。

松田氏のは高橋氏のものとは正反對に平明に書かれたものであり、エルベ・ザール以西を理想的な型とした場合、歪められたドイツの、特にプロイセンを中心にした、所謂後進的近代化が述べられているのであり、やはり大塚氏の一宗教改革と近代社會」に見られる樣なとらえ方をされたルター時代から始められている。ルターとフッガーをそれぞれの社會層の代表として觀察した氏は、同樣に十九世紀ドイツ社會をもグーツヘルの後裔たるユンカーの封建勢力と革新的な市民層との對立に於て說かれる。この點甚だ明晰ではあるが、我々の受けた感じでは類型が先に存在して史實は類型を說明する爲に用いられたように思われるのである。

以上兩氏とも同じ樣な立場と論理から異つた對象を研究されているのであり、而も西ヨーロッパ型を近代化に於ける理想的なものとし、東ヨーロッパ型より更

に後進的であるアジア・日本の近代化に關しても暗々裡に西歐的近代化こそ唯一の正しい近代化であり、それ以外のものを以てしては、必ず失敗に終るであろうと豫想して居られるかのようである。兎も角、こうした方法論は、ともすれば「類型」が「段階」へと移行する危險性をもつものであり、同時に歴史學本來の姿である史實探究の十分な裏付なしに、單なるティープスを弄ぶエピゴーネンを生じないとは斷言出來ぬであろう。

こうした際に増田四郎氏の「西歐市民意識の形成」をみた事は、まことに興味深いものがあつた。この書が取扱つている問題の範圍は、相當な廣さをもつているのであり、例えば「轉換期の歴史把握のために」なる項に於ては、時代轉換が精神の變革であるとされ、更にはランケ史學の批判にまで及んできている。しかし著者自らも言われるように、この書を成立せしめた背後にあるものは、西洋史研究を通じて、東洋社會との比較に迫らんとする意慾であつた。氏は言うまでもなく中世史家である。從つてこの書は「近代市民社會成立の問題と、多少のつながりはもつているが、しかしそのテーマ自體を問題とするのではなく、むしろ一應それとは別個のことがら」なのである。言い換えれば、東洋社會と對比せられる近代の西歐市民社會の解明を目標としながらも、直接それをテーマにされずに、強いていえば中世史家としての立場より市民意識形成の問題に力點をおかれているのであり、近代史家とは別に、ヨーロッパの流れをとらえんとされているものである。しからばこの市民意識形成の場は何處であつたか。こゝに於いて氏は、ウェーバーを一つの手蔓として、北歐都市にそれを求められる。「マックス・ウェーバーの都市研究」なる論文も、氏の都市研究の道程であるのであろう。しかしこの「北歐市民意識の特異性が、そのまゝの意味で近代的市民意識につながるかどうかは、これまた別個の問題である」のであるが、少くとも兩者が全く別個のものでない事は確であろう。北歐都市は南歐都市の如くに傳統に束縛される事なく、大體十三世紀半にはいずれも自治體を形成し、ローカルを越えた國際的な商人社會をつくりあげていつたのである。この書はその表題が示す如くに、意識が問題なのであり、又直接近代の物質的・精神的基盤を對象としたものではないけれども、近代化を論ずる人々にとつても大きな示唆を與えるものという事が出來よう。

十三、四世紀のバーゼルを中心とした獨逸社會や歐洲商業路の研究には梶山力氏の「近代西歐經濟史論」をあげ得る。若くして世を去られた著者の遺稿集ともいうべきこの書は、著者の若さの故に、どことなく弱々しさを感ぜしめ、所謂問題作とはなり得ないであろうが、ウェーバーやゾンバルトの飜譯に示されたあの眞面目な態度は、こゝでもシュトリーダーやエーレンベルグを相手として我々の眼前で如實に繰りひろげられる。深く範とするに足るものがあつた。

以上戰爭以後の著作、論文の數に比せ

ば、九牛の一毛にも足らざるものを、かけ足で通つた程度となり、而も或る觀點から見たもののみを眺めた結果、例えば「英國社會史」(今井登志喜)「フシーテン運動の研究」(山中謙二)「楔形文字法の研究」(原田慶吉)等の力作をはじめ、ふれるべくしてふれる事の出來なかつた多くの著書、論文があるのであり、この點大方のお赦しを願うものである。

尙注目すべき動向としては、これも現在我國のおかれている現實の中より、從前ともすれば等閑しがちであつたアメリカ及びロシアへの關心が急激に增しこの方面の論者が著しく現われてきた事である。特にアメリカ關係のものは、ジャーナリズムの影響もあり、パンフレット、早分り式のものをはじめ數多くの出版物をみ、雜誌「アメリカ研究」の誕生さえ行われた。しかし二三のものをのぞけば隨分いかがわしいものが多く「米國史」(中尾健式)「現代アメリカ國民史の研究」(今津晃)をはじめ、小原敬士氏や高本八尺博士の活躍をあげ得るにとどまり、將來での奮闘が待たれるのであるが、この方面は外國圖書の輸入に最も惠まれビアード博士の著述を筆頭に、繙譯も盛んに行われ出したようでもあるので、明日への期待がかけられる所以である。

一方ロシア史關係はほとんど未開地である上に、研究書籍の甚だしい不足は學問の進展を一層困難なものとしている。思想史、革命史——單にロシアにとどまらず、英、佛、獨等の革命史研究がさかんになつたことも西洋史の新しい傾向といえる——を中心に、相當數の作品が生れ出たが、正直なところ、科學としての歷史にまでは至つていないという事が出來よう。(ロシア史學に關しては歷研一二八・一三六等にあるオカモト・サブロウ氏の紹介や、「西洋史學」の、木崎良平氏の動向、紹介を參照されたい)

要するに我國西洋史學界は、常に新しい問題とその解決に向つて進んではいるが一、二の例外を除けばようやく第一步を踏み出したばかりといつてよい。幸い不十分ではあるが外國との連絡もつきはじめたのであり、この際、如何にしてセクト主義や封建性を打破するかという事が、將來での飛躍を決定せしむる事となるのであろう。

最後にいかにクリチシズムの性格とは言え、若し以上の言の中に、理解不十分に歸すべき先學への暴言が含まれていたとすれば、寬恕あらん事を。

(附　記)

本記は三名の分擔により成つたものであり、而も三人の連絡必ずしも十分とはいえず、文體、方法等に不一致の點を見た事を深くお詫びする。(衣笠茂・越智武臣・廣實源太郎)